

カンボジア：ポル・ポト後遺症の調査報告

28. MAY. 13 小島正憲

- 1. 「5・20 ポル・ポト犠牲者慰霊祭」
- 2. 労働者の失神工場追跡調査
- 3. バイリン地区の現状
- 4. ポル・ポトの墓
- 5. ポル・ポト裁判進行状況

1. 「あのポル・ポト地獄を忘れるな！」

《 5・20 ポル・ポト犠牲者慰霊祭 》



《犠牲者慰霊祭で演じられたポル・ポト大虐殺の再現寸劇の一場面》

※先日私のキリングフィールドの報告のタノ村の正式名称は、スヴァイトゥ村であったので、ここに訂正しておく。

当日は朝7時から式典が執り行われた。スヴァイトゥ村の慰霊塔前の広場にはテントが張られ、高僧が7人、修行僧が100人以上、行政関係者、小・中学生、村民など、合計2000人以上が参列していた。私は前日買い求めておいた花輪を慰霊塔前に供え、合掌した。慰霊塔は綺麗に清掃され、たくさんの果物などが供えられていたが、花輪は州長と私のものだけだった。そして私は招待席に座るように促された。



慰霊祭はまず参列者紹介から始まり、5人目ぐらいに私の名前が読み上げられた。もちろん外国人は私だけであり、そのとき式場にはほどよめきの声が上がった。そして簡単な読経の後、スヴァイトゥ州の州長の挨拶があった。この挨拶は45分間も延々と続いた。州長はポル・ポト時代の地獄絵図を語り、それを救ったのがカンボジア人民党であることを力説し、その後の経済発展の成果を高らかにうたいあげた。それは明らかに7月28日の総選挙を意識したものであり、カンボジア人民党のプロパガンダだった。次いで、ポル・ポト大虐殺の寸劇が行われた。式場内のあちこちではすすり泣く声が聞こえたが、最後にカンボジア軍が登場し、赤色クメールを打ち破り、勝利の雄叫びを上げるシーンになると、式場内は大きな拍手で包まれた。それを見ながら私は、「実際に赤色クメールを追い払ったのはベトナム軍であり、参列者の中にはそれを体験した人も多いただろうに、これをおかしいとは思わないのだろうか」と思った。

最後に高僧たちの読経が行われた。

それは低い声調で、日本人の私の耳にも馴染みやすいものだった。このとき州長も含めて参列者が高僧の前に両手を合わせ、頭を垂れて跪いたので、私も同様にした。読経に聞き入っていたとき、ふと私は、慰霊塔の方から、だれかに呼ばれたような気がしたので、頭をあげ慰霊塔を見上げてみた。する



5/20、カンボジアでは、各地のキリングフィールドに建てられた慰霊塔の前で、一斉に「ポル・ポト犠牲者慰霊祭」が行われた。もちろん首都プノンペン郊外のチュンエク・キリングフィールドの慰霊祭が最大の物であるが、あえて私はスヴァイトゥ州のスヴァイトゥ村の慰霊祭に参加してみた。地方の慰霊祭の方が、政治色が薄れ、その本当の姿を見極めやすいだろうと思ったからである。なお、この慰霊祭の日はカンボジアの祭日ではないため、多くのカンボジア人が知らないという。



と一番上のガラス窓から数個の頭蓋骨が、何かを語りたように私の方を見ていた。私はそれらの頭蓋骨に向かって、「私は再びこのような惨劇を繰り返させない」ことを誓い、両手を合わせ彼らの成仏を祈った。高僧の読経が済むと、修行僧たちが立ち上がり、政府関係者や村民たちの間を托鉢に回り始めた。それでこの式典は流れ解散のような状態になり、終わった。時刻は9時半を少し回っていた。



この式典はすでに10年以上続いているということだったが、今年はことに選挙目当てのプロパガンダ色が強かったようである。このスヴァイトゥ村はバベット市に近く、そこにある経済特区にはすでに外資企業が数十社進出し、稼働している。それらの外資企業が、この重要な慰霊祭にまったく無関心で、参列すらしていないという事実は、彼らがカンボジア人民の中に土着する意志がないことの証明であり、それではカンボジア人民から信頼を勝ち取ることができないし、したがって事業として成功することが難しいのではないかと、私は思う。

この日、スヴァイトゥ村から30分ほど車で走った場所にあるスヴァイチロン村でも慰霊祭が執り行われていた。私は、ちょうどプノンペンに帰る途中だったので、この慰霊祭にも参加してみた。すでに式典は終了し参列者はいなかった。この場所には他のキリングフィールドにあるような遺骨を収めた慰霊塔がなかったので、テントやイスの後片付けをしていた僧侶にそのことを尋ねると、「ここには遺骨を納めた慰霊塔はない。この村の人たちが、ポル・ポト時代の犠牲者の遺体を500体ほど集め簡単に埋葬したが、野犬などが食い荒らすため、地中深く埋め直し、その上に供養塔を建てた。これがその供養塔だ。今日は、ここに300人ほどの村の人が集まって慰霊祭を行った」と、その供養塔を指差しながら、教えてくれた。私はそれを見て、カンボジアにはキリングフィールドと呼ばれる場所以外にも、このような無数の虐殺現場や埋葬場所があることを、改めて確認した。



2. 工場労働者の集団失神は、ポル・ポト後遺症か？

昨年来、カンボジア短信で、幾度となく工場労働者の集団失神事件について報じてきた。私は、17年前にミャンマーで縫製工場を経営していたし、また現在、バングラデシュで縫製工場を稼働させている。ミャンマーもバングラデシュも、カンボジア同様に暑く、労働環境や栄養事情にも大差はない。しかしながら、ミャンマーでもバングラデシュでも、集団失神事件を体験したことはなく、耳にしたこともない。そこで私は、このカンボジア特有の集団失神はポル・ポト大虐殺のPTSD(心的外傷後ストレス障害)と関係があるのではないかと考え、そのような通信を行ってきた。だが内心、自分でも、「この仮説はこじつけ過ぎなのではないか」と思ってもいた。そんなとき、読者の大学教授から、この仮説には無理があると、下記のような指摘を受けた。

カンボジア女性労働者の失神について、極めて似た現象がマルクスの「資本論」の中に書かれています。

「30人から40人のミシン工がいっしょに働いている天井の低い仕事場に入ったときに受ける感じは、がまんのできないものである。……その熱気は、アイロンを熱するためのガス炉のせいでもあるが、恐ろしいものである。……このような仕事場では、おもにいわゆる適度な労働時間、すなわち朝の8時から晩の6時までの労働時間が実行されている場合にさえも、毎日3人や4人はきまって卒倒するのである」(「資本論」第1巻 第13章 第8節)。

私の意見は、この現象はそれ以前に「のどかな」農村生活に慣れた人々がこの緊張に耐えかねて起こしてしまうものだと思います。そうしたストレスが常態化した社会では生じません。逆に言うと、カンボジアの過去の大虐殺が原因と主張するには少し無理があるのではないのでしょうか。

そこで私は今回、実際に集団失神事件が発生した工場に立ち入って、その真因を調査してみることにした。まず集団失神事件が起きたプノンペン市内の工場数社に、日本の縫製団体の代表という身分を明らかにして、電話で取材を申し込んだ。しかし予想通り、すべての工場に断られた。もちろんバイヤーを装って、工場に立ち入るという手も考えたが、卑怯な手段を取りたくなかったので、正攻法で行ったのである。仕方がないので、とにかく工場周辺に行って、近くの露天商や昼食時に工場から出てくる労働者から直接聞き取り調査を行うことにした。

まずプノンペン市東南のミンチェイ地区にある Due Cotton 社に行ってみた。この地区には、零細縫製工場が無秩序に立ち並んでおり、一見して労働環境が劣悪であることがわかった。工場の前にある露店で、集団失神事件の有無を聞いたところ、それは本当にあったという。露天商のおばさんが、この工場のすぐ隣に女子寮があるので、そこで直接聞いてみるとよいというので、すぐに女子寮に行き、その1室をノックしてみた。すると一人の若い女性が目をこすりながらドアを開けてくれた。彼女は、夜勤明けで、今寝ついたところだという。彼女に、単刀直入



に、集団失神事件について聞いてみたところ、驚いたことに、「先日、昼の3時ごろ、**工場の一角にお化けが出た。それを見た女性が失神**し、それを助けようとした女性も倒れた。これが3日間連続して続き、合計で15人ほどの女性が失神し倒れた」と、真顔で話してくれた。続けて、「3日後になって、やっと工場の責任者がやってきて、工場内を整理し、僧侶を連れてきて靈魂を鎮めるお祓いを行った。それでやっとお化けは出なくなった。この工場は2年前に立てられたが、そのとき建設途中で掘り出された多くの遺骨などの供養をまったくしなかった。きっとそのお化けが出たのだらう」と語ってくれた。さらに「自分の月給は手取り120US\$ほどで、工場の待遇に大きな不満はない。また食事毎食取っている。寮費の補助もあるので、夜勤もできる。工場内では特別に健康に悪い化学薬品などを使っていない。そんなに暑くもない」などと語ってくれた。

次に、最近、大量失神事件を起こしたプノンペン市南東のカーンミンチェイのSL Garment社に行ってみた。この付近一帯は、プノンペン市の汚水が集中している場所で、周辺には悪臭がただよっており、おまけにコンテナトラックなどが砂埃を巻き上げ道路をひっきりなしに行き交っており、マスクなしでは歩けないほどだった。その中に大型縫製工場などが林立しており、労働環境がよいとはとても言えない立地であった。ここでもまず露天商に、失神事件の有無を聞いてみたところ、確かに有ったという。ちょうど昼食時になったので、工場から出てくる労働者たちに聞いてみると、「この工場には1000人ぐらいの労働者が働いている。



月給は100US\$以上で、工場内には安く食べられる食堂がある。暑さ対策としてウォータークーラーも備え付けてある。先日、整備工の一人が、製品の洗い加工用に使う洗剤を、ウォータークーラー用の配管に間違えて注入してしまった。それが工場内にまき散らされたので、配管の元の方にいた労働者がそれを吸い込んで倒れた。当初は原因がわからず、3日間連続して合計150人ほどが失神した。3日目になって、やっと責任者が現場に来て原因を探り当て、配管を清掃したので、それ以降の失神者はでていない」と、話してくれた。私は工場から出てくる労働者たちをよく観察してみたが、意外に太った女性が多く、栄養失調気味で痩せた女性を見つけることの方が困難だった。また茶髪であったり、ピアスなどの装飾品をつけていたり、結構、おしゃれな女性が多く、彼女たちから「貧困に喘ぐ労働者」という雰囲気を感じる取することはできなかった。

結局この日の取材では、「カンボジアの集団失神がポル・ポト後遺症」であるということ立証することはできなかった。私はそのような事態も予測していたので、事前に、この日の夕方、カンボジアの代表的な労働組合の幹部と会食し、集団失神の真因に関して情報交換をする予定にしていた。ところが、残念ながら、労働組合の幹部が急にカンダル州で大きな事件が起きたということで来ることができなくなり、会食はお流れとなった。私は次回、再度、労働組合幹部と会い、彼らの協力のもとに、失神事件工場(私が掴んでいるだけでも10社以上)を、全部、調査してみることにする。

それでも今回の調査で、次のことがわかったことは収穫であったと考える。

- ①これらの問題を起こした工場は、経済特区などにある工場とは比較にならないほど、立地条件が劣悪であること。
- ②これらの工場で働く労働者の労働条件は、集団失神が起きるほど劣悪ではないこと。
- ③これらの工場には、常駐の責任者がおらず、不測の事態への対処が遅いこと。

※ちなみにわが社では、全工場で工場内に宿舎を作り、私を含めて日本人スタッフがそこに寝泊まりしており、有事の際にはただちに現場に駆けつけることができる態勢にしている。

- ④カンボジアにはポル・ポト大虐殺があったことは事実だし、それは解決済みではなく、労働者の心中に PTSD があるということを前提に、経営者はそのための細かな配慮を欠かさず、慰霊祭などを行い、労働者の心理の安定に神経を配るべきであること。

3. パイリン特別市に緊張感なし

バタンバンからシンボンへ向かう国道5号線を、途中で左折し57号線に入り、1時間半ほど走ると、パイリン特別市に入る。ポル・ポトの最後の拠点となったこのパイリン特別市は、今ではのんびりした田舎町の風情を漂わせており、そこからは往年の緊張感はまったく窺えない。現在の人口は7万人で、ポル・ポトの孫が市長を務めているという(未確認情報)。ただしこの特別市の周辺は、カンボジアでも有数の地雷残存地帯であり、うかつに足を踏み入れることはできないという。特別市の中心部に入る手前に、ワット・プノン・ヤットという小高い丘がある。この



丘は、どこを掘っても、サファイヤやルビーの宝石がゴロゴロ出てくるということで、ポル・ポト軍の重要な資金源になっていたということである。今では、頂上にはミャンマーのパゴダ風の黄金に輝く塔が、そのすぐ下に高さ26mの巨大な観音立像が建てられ、丘全体が寺院とされて盗掘から保護されている。丘の中腹には、トーチカがあり、わずかにポ

ル・ポト時代の名残を留めている。この丘から10分ほどの場所にイエン・サリの旧居がある。さらに30分ほど走るとタイとの国境となる。そこには小さいながらもカジノが数軒あり、タイ人の観光客も少なからず訪れているようだった。

4. 入場料を取る「ポル・ポトの墓、タ・モクの旧居」

オードミンチェイ州のタイ国境付近に、ポル・ポトの墓があるというので、そこに行ってみた。その地域はポル・ポトやタ・モクの生まれ故郷であり、今でもポル・ポト人気強い場所であるという。国道67号線を北上していくと、それまで延々と続いてきた平原が、急に山に遮られる。その山道を登り切ると、突然、巨大なホテル風の建設中の建物が現れた。ここにもカジノができるのだという。そのカジノに見下ろされるようにして、茂みの中に、ポル・ポトの墓があった。その入り口には、簡単なゲートがあり、ガードマンが居て、入場料20US\$を徴収された。1か月間に100人ほどの外人観光客が来るという。フランス人が多いようだ。墓は、土盛りを金網で囲っただけの粗末なもので、墓碑もなかったのので、真偽を確かめたところ、そこは火葬した場所で、本当の墓はもっとタイ側の山の上だという。

村には、タ・モクの旧居も保存されているというので、そこにも行ってみた。ここでも20US\$を徴収された。この付近は一带には湖や森が多く、村のデートスポットになっており、バイクに乗った若者たちが木陰で楽しそうに語っていた。オードミンチェイ州はタイに近く、タイからの思想的・文化的影響を強く受けているようである。さらに現在紛争中のプリアビビア問題が解決すれば、カジノを含めて、怒濤のようにそれが浸透してくるのであろう。



↑ 《 ポル・ポトの火葬現場 》



↑ 《 タ・モクの旧居 》

5. 遅々として進まないポル・ポト裁判

ポル・ポト派裁判が行われている法廷は、プノンペン市内から国道4号線を、車で30～40分ほど走ったカンポール地区という場所にあり、カンボジア市民の足であるトゥクトゥクで行くには遠くてちょっと無理なところにある。しかも道路沿いに小さな看板が出ているだけで、前面にはカンボジア軍の大きな建物があり、その脇の小道を通り抜けて行かねばならず、カンボジア人民に広く開放されているとは言い難い場所である。それでも開廷時には、地方からバスでカンボジア人民が傍聴に動員されているそうである。この法廷も現政権のプロパガンダに利用されている側面があるようである。ちなみにこの法廷の正式名称は、Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia (略称:ECCC)。2006年に開始された裁判は、すでに7年を経過したが、この間に判決が下されたのは、トゥールスレン収容所の所長だったカン・ケック・イウに対する無期懲役だけである。イエン・サリ元副首相兼外相は2013年3月に死亡し、そのイエン・サリの妻(元社会問題相)は「認知症」と診断され2012年にその身柄を釈放された。残る被告は、ヌオン・チア元人民代表議会議長(86)とキュー・サンファン元幹部会議長(81)だけである。この二人も高齢のため、法廷はたびたび中断している。また最近では、法廷の維持費用の枯渇による裁判従事者への給料遅配問題からストライキなども生じて、裁判は遅々として進まない状況となっている。



《 後ろが、ECCC の建物 》

もともとこの法廷の開廷にあたっては、「ポル・ポト派の背後に、中国の思想的・軍事的・経済的支援があったという事実を暴き出さない」という国際間での暗黙の了解があったということであり、国内では「虐殺には赤色クメールの末端から最高幹部までがかかわり、そのうち何人かは今も政府の中核にあるという“厄介な事情”が存在している。関係者にとって裁判の引き延ばしの結果の被告たちの死は、好都合なのかもしれない。

私は今回のカンボジア調査旅行を前に、ニュールンベルグ裁判や東京裁判などを調べてみた。そこでわかったことは、東京裁判では米国人弁護士たちが、「戦勝者が戦敗者を裁くという裁判」そのものが無効であるという激しい弁論を展開したことであり、このとき初めて民主主義の実態を間近に見た日本人傍聴者の多くが驚いたということであった。そして私は、このポル・ポト派裁判では、「世界の民主主義陣営はいかなる論陣を張っているのか」という点を知りたいと思うようになった。残念ながら、今回は休廷中で傍聴することはできなかったが、次回は開廷時に合わせて来て、ポル・ポト裁判を傍聴してみるつもりである。また当初からこの裁判を傍聴し続けている日本人がいるということなので、その人と会い、多くを聞き出したいと思っている。

以上